

医療安全トピックス TOPICS

Vol. 127

井上 純子

公益財団法人日本医療機能評価機構
医療事故防止事業部 医療安全課

第63回報告書 「温めたタオルによる熱傷に関連した事例」について

公益財団法人日本医療機能評価機構では、医療事故情報収集等事業（以下：本事業）を行っています。本事業では、医療安全推進のため四半期ごとに報告書を作成・公表しています。報告書では、分析対象期間に報告された医療事故情報からテーマを設定し、過去に遡って事例検索と分析を行っています。

本稿では、2020年12月に公表した第63回報告書の分析テーマ「温めたタオルによる熱傷に関連した事例」について紹介します。

●温めたタオルにより熱傷を来した事例

本事業では、清拭の際に準備した熱いタオルにより熱傷を来した事例について、医療安全情報No.46（2010年9月提供）「清拭用タオルによる熱傷」で注意喚起を行いました。しかし、本事業には、温めたタオルを清拭以外に使用して熱傷を来した事例も報告されています。

そこで、清拭以外の目的で温めたタオルを使用し、患者さんが熱傷を来した事例12件を取り上げて分析を行いました。温めたタオルを使用した目的を分類すると、静脈穿刺のための血管拡張を目的とした事例が最も多く、6件報告されていました（図表1）。また、タオルを当てていた場所は四肢が9件と、大半を占めていました（図表2）。

●温めたタオルを使用した患者の状況

温めたタオルが当たっている場所が熱くなれば、患者から訴えがあるはずですが、報告時の選択項目である「直前の患者の状態」を集計したところ、「意識障害」が最も多く、自ら「熱い」ことを伝えることができない状況がわかりました。

そのほかにも、下肢障害や上肢障害などが選択されている事例もあり、感覚の障害から熱さを感じる事ができない状況があった可能性が考えられます。

●使用したタオルの温め方と当てていた時間

事例内に記載されたタオルの温め方を整理すると、濡らしたタオルを電子レンジで温めた事例が12件中7件でした（図表3）。また、患者にタオルを当てていた時間は、5分以下と短い事例もあれば、20分以上の事例も報告されていました（図表4）。

電子レンジはモノの内側を加熱するのに適しており、外側から触った温度よりも中心部の温度が高くなっていた可能性があります。また、タオルの温度を測定するのは難しく、現場では看護師が自分の手や腕にタオルを当てて温度を確認することが多いと思われる。しかし、タオルの内側の温度が想定よりも高くなっていたり、当てる時間の長さによっては、患者に影響を及ぼす可能性がありました。